第２部パネル　分科会 15 新規

自分らしく暮らせる施設の選び方

提言

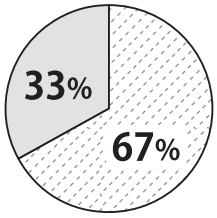
自分らしく暮らせる施設とは個人差を大切にする施設、自由度が高い施設。「共同の住まい」としての建物になっていること、プライバシーへの配慮があること。
そして施設は地域と共存し、地域に開かれ、地域のサービス・資源の活用ができること。

登壇者

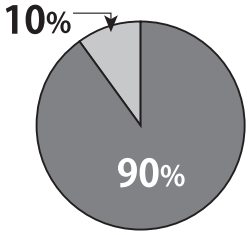
【進行役】
新津　ふみ子氏　（特非）メイアイヘルプユー理事長
対馬　徳昭氏　つしま医療福祉グループ代表
本間　郁子氏　（公財）Uビジョン研究所理事長
藤田　卓也氏　（社福）愛生福祉会常務理事

アンケートの結果　参加者概数：96名（オンライン：90名、会場：６名）　回答者数：15名

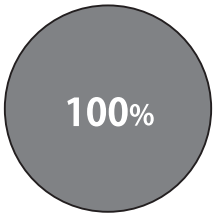
回答者の所属先



助け合い活動をすすめる立場の方



その他の方



議事要旨　新津 ふみ子氏

1．テーマの狙いは「施設に入っても自分らしく生きるための施設を選ぶにはどうしたらいいのか」

本分科会は、「施設入所」を取り上げている。「自分らしく暮らす・生きる」ための選択肢の一つとして施設の利用を検討した場合、私たちはどのような施設を選んだらよいのか、その見極めについて検討した。対象とした施設は、生活の場であり、そして命を閉じるまで利用できる公的施設である特別養護老人ホーム（以下特養）を選択した。

2．登壇者からの提言

本間さんは、特養のサービスの質を評価する項目を法人として独自に定め、第三者の視点で評価をして「認証」をしている。特養を選ぶポイントとして、＊運営主体の理念は何か、＊理念を実現するために実践していることは何か、＊利用者の生活の質（QOL）のチェック、＊職員教育の体制、＊認知症ケア・ターミナルケアの支援体制、＊サービスの質を評価する第三者機関の導入を挙げた。そして、選択に際しては見学が前提であり、見学の視点は自分で考えることである。自分はどのように生きたいのか、生活したいのかが明確になった時に見学の視点が定まると強調した。

対馬さんは、北海道を中心に複数の福祉事業を実施。特別養護老人ホームを核とし、在宅部門の事業も複数設置し、「地域包括ケア」に取り組んでいる。特養経営者として、できる限り家庭での生活に準ずることを方針とし、ケア・支援を提供する時に大切にしていることは、＊個人差・可能性を阻害しないこと、＊楽しみを忘れないこと・提供すること、＊地域にあるサービスを活用することを挙げ、実践のためには人材育成と多職種によるチームワークが重要であるとした。

藤田さんは、法人が取り組む複数の特養から、一番歴史が長い高知県所在の特養での取り組みを紹介した。従来型多床室とユニット型特養における居室などの構造や環境面からの工夫や改善、そして地域に必要とされる法人（施設）となることを課題とし、地域貢献活動に積極的に取り組んでいること。また、第三者評価を受審し改善に取り組んでいること、そして、施設の選択時は自分でしっかりと情報収集をすることだとした。

3．提言

登壇者からの紹介や意見交換から、自分らしく暮らせる施設とは、①「自由度が高いこと」「選択できること」。例えば、食事内容、食事時間などはもちろんのこと、趣味、家族などとの面会をはじめとし、複数の選択肢があり選べること、②「共同の住まい・共同生活の場」として、住みやすくするための環境及びプライバシーの尊重が明確であること。例えば、安心・安全を期した設備と同時に自立の維持促進及びプライバシー保護ができる構造（トイレ、入浴等）、そして、しつらえや職員の感じの良さなど気持ちの良い雰囲気であること、③地域に開かれ、入居者が地域の資源を積極的に活用し、地域の人々との交流の機会が日常的にあることである。

私達は、地域で活動をしているうちから、「施設」に関心を持つこと、施設での支援・活動に参加することを意識したい。そして、いつか施設の利用をすることになった時には、積極的な情報の収集、入所体験（ショートステイの利用）などにより、できる限り自分で判断することではないだろうか。

■ 寄せられた声から

- 藤田さんの「混合型ケアハウス」に興味を持ちました。